

第 27 回日本小児脾臓研究会開催にあたり

この度は、第 27 回日本小児脾臓研究会のお世話をさせていただき、たいへん光栄に存じます。

脾臓という臓器は、それぞれの診療研究領域で異なる興味の対象となっており、それを持ち寄ることがこの at home な研究会の存在意義であろうと思っております。そのような実態は、この研究会に繰り返し出席するとよくわかります。各当番世話人の専門領域によってかなり内容が修飾されることによるのでしょう。小児外科医としては、感染関連の話題が取り上げられ、腹部外傷の主な対象臓器でもあり、また摘出手術に関しては、現在の若手医師にとっては鏡視下手術の入門としての意義も大きいものと存じます。私としては、肝胆道系疾患を扱ってきたこともあり、門脈を介した肝臓と脾臓との相関にかねがね興味をいだいておりました。

今回、一般小児外科と肝移植を日常診療として行っている立場として本研究会のお世話をさせていただくこととなりました。特別講演として、長年の門脈圧亢進症の病態治療研究の歴史を担っておられる九州大学外科から新進気鋭の赤星朋比古先生をお招きして、肝脾相関に関するご研究の最新治験をお話いただきたいと思っております。また、要望演題として設定した、特別講演関連の話題や手術手技に関係したものとどまらず、多彩な症例報告や基礎研究など、計 28 題の御応募をいただきました。当初、演題の集まりをたいへん心配しておりましたが杞憂に終わり、皆様のご協力ご支援を深く感謝申し上げます。

飛行機と新幹線で、熊本は関東関西からは十分日帰り圏になってしまいました。プログラムもそれが可能なように設定したつもりですが、逆に十分なおもてなしができずにたいへん申し訳ありません。終了後の簡単な懇親会にはお時間が許せばご参加いただき、会の補足をしていただければとも存じます。皆様の来熊を心よりお待ちしております。

平成 26 年 2 月

第 27 回日本小児脾臓研究会

会長 猪股裕紀洋

(熊本大学小児外科・移植外科 教授)